

木下孝則と葵橋博士通り

迂闊であった。毎日、毎日、相鉄の中吊り広告を見ながら兄弟の画家と思っていた。

「昭和の気品、横浜の洋画家」というキャッチコピーに惑わされたようだ。

会期を残り4日にして、父親の語っていた「キノシタ コウソク」がようやく「木下孝則（きのした たかのり）」と結びついた。

残り3日の6月7日（平成20年）の金曜日、勤め先から小田急江ノ島線、JR東海道線を乗り継いで、みなとみらいの横浜美術館へ向かう。

子供の頃、父親は「婦女子は三等車に乗ってはいけない。」という主義だったので、当時から東海道線や横須賀線に乗るときはグリーン車であった。今もその気分が抜けないし、モバイルSuicaという困ったツールもある。

美術館は空いていた。金曜日のみ午後8時まで開館しているが、木下孝則の今日の知名度を顕しているようである。おそらく、木下孝則を懐かしく鑑賞できるのは戦前生まれのリベラリストであろう。

戦後、彼の婦人画は、週間朝日の表紙を毎号飾っていた。その意味では篠山紀信の週間朝日の激写は新しくも何んでもないのである。

木下孝則（明治27年—昭和48年）の絵には光があった。ライティングのそれである。

これに対して父親の好んだもう一方の向井潤吉（大正5年—平成7年）の絵には光がない。

だが、互いに不自然さはない。それだけ抑制された絵画表現の技巧があると言えようか。

私は、父親が定年後描いていた、バラを始めとした花の絵がところ狭しと並んでいるかと思って展示室に入った。

写実的な絵画が並んでいる。しかし、既に今日的ではなく、かと言って是非とも鑑賞すべき古典でもないところが、今日現在の評価であろうか。

展示室を進む。裸婦が多数ある。これなどもインターネットで情報が蔓延る今日、鑑賞する気力すらない。

そうこうするうちに、テーマも散らばり、展示室も終わりに近づいた気配である。

私は、展示室の角を曲がった。

葵（あおい）染付け花瓶の花の絵

次の展示室の正面に向かい首筋の血の気が引いた。背中にゾクゾクが走ったでもいい。

正面、左右の壁面に、バラを始めとした青い染付けの花瓶に挿した花の絵がところ狭しと並んでいる。やはり父親の描き求めた絵の原点がここにあった。暫し、呆然とする。

父親が横浜美術館正面のK病院で亡くなって三周忌。その時期に、木下孝則回顧展が開催されたのも不思議な縁である。

千駄ヶ谷902番地

昭和10年から東京大空襲で焼け野原になるまで、父親の多感な10代後半、増田家は木下孝則家と隣同士であった。今日の渋谷区代々木2-6、当時の千駄ヶ谷903と902番地である。

木下孝則家の土地は、元々増田家の敷地であった。

おそらく、少年であった父親は度々隣家の垣根を潜り、木下画伯に絵の教えを受けたであろう。あるいは、年少の妹達は求めに応じてモデル役になったのかも知れない。

当時、この付近は葵橋博士通りと呼ばれた。文人墨客やその卵が多く住んだ土地柄であった。

私が物心ついた昭和40年代前半でも、この付近は新宿駅前や三丁目の喧騒とは程遠く、ビルといえば祖母の建てた増田ビルと線路側の池田ビル（もとの池田産婦人科）ぐらいであった。

池田ビルは名前を変えて現存するが、その南側の現在のJR東日本の本社ビル付近は、江戸時代の火除け地さながらの空き地であった。よく、赤土や砂利山の上に登って冴えない黄色と群青色の小田急の電車やカナリヤ色の中央線各駅停車、現在の高島屋付近にあった貨物線を眺めていたものである。

父親が定年後に描いた絵は散逸してしまった。

次の絵は、平成元年頃、講師として通っていた県立大船工業技術高等学校の文化祭に展示した絵を、何方かに撮影していただいたものである。

父親は習作だから売れないよと言っていた。確かに木下孝則展を見る限り習作らしかった。



Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

<http://soumokukihinkagami.com/>